

特240
194

×
複写

全村皆讀運動について

長野縣中央圖書館

始



特240
194

時局下に於ける

全村の讀書運動

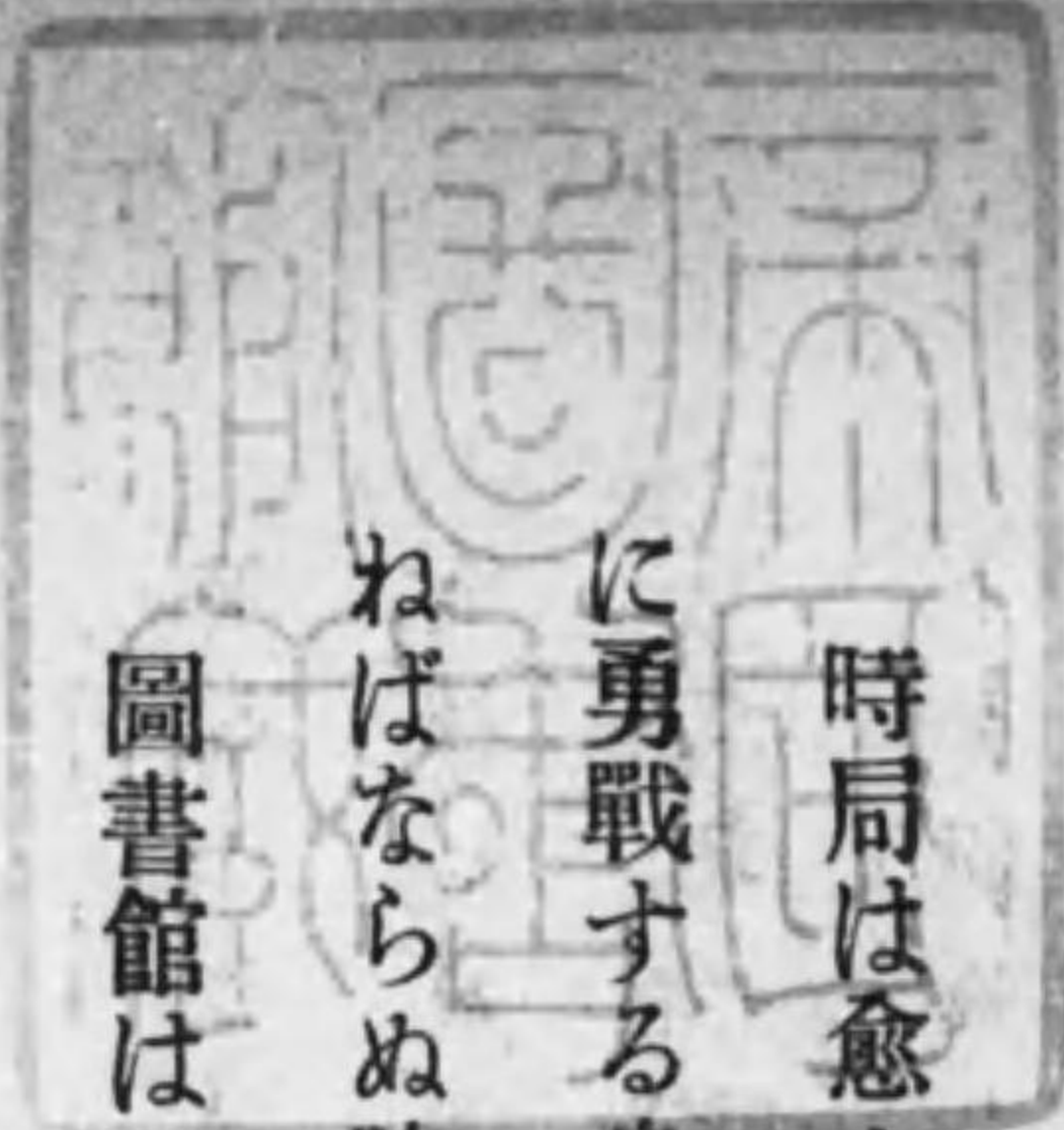
の意義と體驗

とを記録してあります

全村皆讀運動について

長野縣中央圖書館長 乙部 泉 三 郎

時局は愈々重大となつた。大政翼賛臣道實踐の道を明にし、第一線に勇戦する皇軍將兵の御苦勞に應へ銃後國民の益々緊張努力を加へねばならぬ時である。



圖書館は閑人からの希望によつて書物を貸與する施設でない事は

明白であるが、動もすると時局下不急の施設であるかの如く誤解を受ける。これは従來の圖書館の經營のみを觀て、時局下重大な役割を演



じつゝある現下の圖書館を觀ざるがためである。圖書館にはその與へられた職能を十二分に發揮し得る時機が來たのである。

現在識者によつて大なる注意が拂はれ、要路當局によつて着々實施されんとしてゐる問題の中に、農村文化の向上、農村娛樂の充實なる問題が確然として浮び上つて來てゐる。東亞新秩序の建設には日本全體の文化がその水準を高めねばならず、それがためには日本農村の文化の向上を目指さねばならぬ。

近來頻りに獎勵されてゐる農村に於ける紙芝居を始め、ラヂオ、農村演劇、映畫等と共に、農村に於ける讀書運動も亦當然之を獎勵し之

を指導せねばならぬ事は當然である。既に文部省は先年より各府縣圖書館に獎勵金を交附して巡回文庫等を行はしめ、内閣情報局は週報紙上に常に優良圖書の紹介記事を連載して、國民の讀書に關心ある事を積極的に表明してゐる。

何はともあれ、農村に於て圖書館の運営宜敷きを得るならば青年の知識の向上はもとより、一般村民の知的向上と健全なる娛樂とに對して想像以上の効果を擧げ、延ひては一村の平和と全村の興隆とを期待する事が出来る。

長野縣の青年が讀書運動に獻身してゐる事は既に周知の事實であ

るが、今は單に青年だけの讀書に満足すべき時ではない。全村皆讀を要するの時である。一村の平和と一村の向上との爲に村の圖書館を必要とする時代である。難治村と云はれた田口村が再起したのもその敬老文庫と稱する全村皆讀運動が又精神的動力を與へた事は本書に採録した同館の記事に明白である。

村の圖書館は敬老文庫が其の目的では勿論無いが、敬老文庫を實施する事によつて圖書館に對する認識を改め、更に非常時局下全村皆讀運動にまで發展し、讀書によつて國家の方針も正しく認識し、臣道を知り、皇民としての御奉公を完遂し得るに至る事を信ずるものである

敬老文庫目録

郷土

正受老人を見よ	信濃教	信濃毎日新聞社	昭和一〇	・四五
放送講話の佐久間象山	石川謙著	文教書院	昭和一一	一・二〇
維新の先覺者	寺門咲平著	西澤書店	昭和一六	一・三〇
煩惱人一茶の生涯	相馬御風著	實業之日本社	昭和一一	一・五〇
人間一茶の生涯	吉松祐一著	大同館	昭和一二	二・〇〇

隨筆

近衛公清談錄	伊藤武編	千倉書房	昭和一二	一・〇〇
明日は世界の相馬御風著	相馬御風著	人文書院	昭和一四	一・六〇
持久戦時代表	下村海南著	第一書房	昭和一五	一・八〇
農久戦時代表	有馬頼寧著	岡倉書房	昭和一三	一・八〇
土に叫ぶ普及版	松田甚次郎著	羽田書店	昭和一四	一・二〇

修養

御製を拜して 戦争に就ての反省	井上 孚 磨	國民精神文化研究所	昭和一二	一・六〇
わが愛する生活	石川 武 美著	主婦之女社	昭和一五	一・八〇
明るい生活	佐藤 義 亮著	新潮社	昭和一四	一・五〇
體驗を語る	野間 清 治述	講談社	昭和一四	一・三〇
母	友松 圓 諦著	倍成社	昭和一四	一・五〇
親ごころ子ごころ (續感激實話全集3)	飯田 豊 二編	金星堂	昭和一一	一・三〇
世を動かす少年の力 (續感激實話全集4)	飯田 豊 二編	金星堂	昭和一一	一・三〇
熱と愛の結晶 まごころ	村上 豊 寛著	文友堂書店	昭和一〇	一・〇〇
白虎隊を生んだ書	石川 政 芳著	大元社	昭和一五	一・三〇
貧乏を征服した人々	帆刈 芳之助著	泰文館	昭和一四	一・五〇
銃後 獨語	安保 清 種著	實業之日本社	昭和一四	一・七〇
一商人として―所信と體驗―	相馬 愛 藏著	岩波書店	昭和一二	一・〇〇
偉人秘話	山名 次 郎著	實業之日本社	昭和一二	一・三〇
無軌道教育法	品川 義 介著	千倉書房	昭和一一	一・五〇
佛教生活法	長井 眞 琴著	大東出版社	昭和一四	一・五〇

國家

人間と死	友松 圓 諦著	倍成社	昭和一四	一・二〇
俚諺讀本	細川 謙 二著	厚生閣	昭和一一	一・八〇
迷信に陥るまで	中村 古 峽著	大東出版社	昭和一一	一・〇〇

皇道の眞精神	土肥原 賢 二著	東京玉川學園出版部	昭和一五	一・二〇
日本の前進	永田 秀 次郎	新潮社	昭和一四	一・〇〇
新体制とはどんなことか	報知新聞社編輯部	内外書房	昭和一五	一・五〇
常會の組織とその運営	佐々井 信 太郎述	中央聯合會	昭和一四	一・四〇
新体制讀本	大渡 順 二著	新紀元社	昭和一五	一・三〇
家庭防空讀本	波多野 繁 藏著	モナス	昭和一四	一・九〇
これぞ日本兵	上澤 謙 二著	新生堂	昭和一五	一・二〇
開拓青少年義勇軍	朝日新聞社編	同社	昭和一四	一・五〇

軍事

少年航空兵の手記	東條 英 機著	中央公論社	昭和一四	一・五〇
陸軍の若鷲	西原 勝 著	實業之日本社	昭和一四	一・三〇

戰車戰記 藤田實彦著 大阪毎日新聞社 昭和一五 一九〇
 ノモンハン實戰記 樋口紅陽著 東京朝日新聞社 昭和一五 一二〇
 大東出版社 昭和一五 一八〇

家庭・生活

生活の開拓 伊福部隆彦著 今日の問題社 昭和一五 一六〇
 心ゆたかな生活 清水谷善照著 宮越太陽堂書房 昭和一五 一五〇
 父母の書 伊福部敬子著 教材社 昭和一四 一五〇
 教育者としての母 兒玉九十著 主婦之友社 昭和一四 一三〇
 若き母に贈る 伊福部敬子著 教材社 昭和一四 一四〇

文學

我れひとり思ふ・欣求淨土 吉田絃二郎著 新潮社 昭和一五 一三〇
 宮澤賢治名作選 松田甚次郎編 羽田書店 昭和一四 三〇〇
 農青年報告 信濃毎日新聞社編 竹村書房 昭和一五 一六〇
 戦地の子供 國分一太郎著 中央公論社 昭和一五 二〇〇
 幼見にかす 武田雪夫著 金の星社 昭和一四 一〇〇

少國民 田口きみ子著 主婦之友社 昭和一五 一八〇
 綴方教室 豊田正子著 中央公論社 昭和一四 一五〇
 戦争とふたりの婦人 山本有三著 岩波書店 昭和一四 一五〇
 小島の春 小川正子著 長崎書店 昭和一四 一二〇
 大日向村 和田正傳著 朝日新聞社 昭和一四 一八〇
 子供と兵隊 坪田讓治著 朝日新聞社 昭和一四 一〇〇
 土と兵隊 火野葦平著 改造社 昭和一三 一六〇
 戦線 林芙美子著 朝日新聞社 昭和一三 一〇〇
 家庭語 桐本六福共著 富山房 昭和八 二八〇
 乃木將軍 眞山果著 講談社 昭和八 一六〇
 日本芝居物語 眞山果著 講談社 昭和八 一六〇
 宮本武蔵 吉川英治著 講談社 昭和一四 一〇〇
 第一卷 地水の巻 第四卷 空の巻
 第二卷 水火の巻 第五卷 二天の巻
 第三卷 風の巻 第六卷 圓明の巻

茶漬 三略 吉川英治著 朝日新聞社 昭和一四 一五〇
 遊記 戦時體制版 弓館芳夫譯 第一書房 昭和一四 一七八

歴史・傳記

世界の光・日本大類	伸著	アールス	昭和一五	一・〇〇
二千六百年史抄	寛著	同盟通信社	昭和一五	・三五
大日本國體物語	白井勇著	博文館	昭和一五	二・四〇
西園寺公望傳	木村毅著	傳記刊行會	昭和一二	一・〇〇
大楠公	林彌三著	萬里閣	昭和一五	一・四〇
楠公ヲ語ル	林彌三著	文友堂書店	昭和一三	一・五〇
將軍乃木	櫻井忠溫著	實業之日本社	昭和三一	一・二〇
昭和三西住戰車長傳	菊池寛著	東京日日新聞社	昭和一四	二・〇〇
獨裁王ヒットラア	黒田禮二著	新潮社	昭和一一	一・四〇
偉人の母續篇	千葉春村著	婦女界社	昭和一三	一・三〇
日本の偉れた人々	武者小路實篤著	山本書店	昭和一〇	一・五〇
日本高僧傳	高神覺昇編	講談社	昭和一四	一・八〇
人物わしが國さ	伊藤金次郎著	改造社	昭和一三	二・五〇
軍人わしが國さ	伊藤金次郎著	今日の問題社	昭和一四	二・二〇

父の映像	大阪毎日新聞社共編	同社	昭和一三	一・〇〇
頭山滿翁の話	中野刀水編	新英社	昭和一二	一・六〇
近世支那興亡一百年	本山桂川著	實業之日本社	昭和一三	一・五〇
少年支那の歴史	塚田忠泰著	大同館	昭和一三	二・五〇
少年明治維新史物語	垣本清雄著	大同館	昭和一四	二・五〇
少年東郷平八郎	山口實著	大同館	昭和一二	二・〇〇
少年野口英世博士	奈良島知堂著	大同館	昭和一二	二・〇〇

地誌・紀行

少年滿洲讀本	長與善郎著	日本文化協會	昭和一三	一・〇〇
南支那風土記	後藤元宏著	武道館	昭和七	二・五〇
支那紀行	中村正利著	大東出版社	昭和一五	一・八〇
南洋紀行	丸山義二著	第一書房	昭和一五	・七八
		興亜日本社	昭和一五	一・五〇

敬老文庫について

長野縣南佐久郡田口村圖書館長

鹽谷進 一

一、難治村を如何にせん

私は田口村圖書館の鹽谷進一であります。本日佛都長野市におきまして、五縣下圖書館事業研究會が開催されますことを衷心より喜んで居る次第であります。

「敬老文庫について」申上げるのでありますが、私が今更事新らしく説明する迄もなく「敬老」と云ふ言葉が既に家族的な日本人的な、云ふに謂はれぬ親しみと味ひとを以て皆様の胸中深く迫るものがあると信じます。

私の村は其昔佐久一郷を支配した大名の居城、龍岡城五陵廓を以つて有名であります。それを中心に文化の繰りひろげられた所であります。南に八ヶ岳、蓼科、北に噴煙絶へざる淺岳を望んで清流千曲川に沿つた面積五方里、人口約七千、山紫水明の語を用ひては

からない所であります。元來が農を以つて立つ村でありますが、封建時代よりの思潮として、農民に教育は不必要だと云ふあやまつた指導精神に災ひされまして教育施設は恥かしい程少ないのであります。

かつては縣下の模範村としてしられた田口村が、一度昭和初期の經濟恐慌に見舞はれるや、左傾思想の充滿になり、利己的利那的主義主張に災ひされ、没我の精神は没却され、不忠不善の輩の跋扈となつて、村長もなく、助役もなく、あまつさへ小學校兒童の同盟休校に迄魔の手はのび、純真な童心をもむしばむ程となつたのであります。

一、村塾運動

それを思ひこれを考へる時、村人の和を爲し村を興す事には正しい教育施設の確立こそ急務中の急務である……と、心ある青年同志に依つて、**村塾運動**が提唱され、**圖書館經營の刷新**が畫されたのであります。

幸にして、村塾運動は昭和十一年縣の計畫によりまして、縣下四ヶ所に開設されました。その一つとして田口村塾が開かれ、青年の念願は酬ひられたのであります。それ以來縣よりの御指導と多大なる御支援をいたゞきまして次の如き塾規を定め、青年の志氣志心の養成につとめて居ります。

一、吾等は皇國日本の臣民なり、各々職務に勉勵し皇運を扶翼すべし。

忠孝一本清明雄渾なる日本精神の涵養顯現を期す。

一、吾等は忠臣に學び、老農に聞き以つて道心を長養し技能を練磨し之を實踐躬行す。
 一、修養は一身一代に止まらず、之を家族朋友郷黨子孫に及ぼし、以つて万世の爲に大平を開く。

一、吾等は寸陰を惜み聖賢に視しみ、往聖の爲に絶學を繼ぎ以て道を明らめ名分を正す
 一、村風の淳美自治の向上は禮節と情義に俟つ、吾等は毎に隣保共助に力め狎悔の交りあるべからず。

一、産業の進歩發達は一に自己心田の開拓に在り、吾等は修身治心以て天地の化育に參じ其惠澤を助長すべし。

一、吾等は義勇奉公の至誠を致し、郷土永安皇國隆昌を期す。

以上の如き綱領によつて、私を忘れて村風の淳美の爲に努力して居る人々に村長壺谷慶之助氏あり、中澤喜一郎、細谷良信君がおります。農村にとつては最高の教學研究施設であります。然し乍ら入塾する爲には初期二ヶ年間は縣知事の許可を得たものに限られ、以後は村長の許可を得たものに限られまして、村民一般の教育施設とは謂ひ得ない譯であります。就きまして一般の思想善導教育施設を圖書館に求めたのであります。

三、全村の皆讀運動

一時有名な難治村とされた田口村でありますから、圖書館等の藏書も自然左傾思潮を多分に持った書籍が非常に多く、その經營に行詰りを來して居つたのであります。

昭和十二年春、乙部縣立圖書館長の御來館の砌り圖書館經營の要諦を聞き、行詰つた圖書館經營の刷新を計つたのであります。

この折乙部館長の申されるに

「青年の間には既に青年團文庫が設けられて何れの青年も等しく讀書の恩恵を享受してゐる。青年の生活は讀書あつて初めてその意義を爲すと云ふべきである。併しながら農村に於ては青年だけが讀書をなしそれを以つて満足すべきものではない。

農村は青年だけの農村ではない。青年も老年も少年もある。少年、壯年は共に自ら讀書をなし得る人々であるが、老年に至つては自ら進んで讀書を爲し得ぬ人々が澤山ある。然しながら讀書を不必要とするのでは決してない。

青年は自分達だけが讀書をして、能事足れりとするべきではない。須らく音讀し代讀して老いたる人々にこれを聞かせ、老人の幸福を若人の幸福と感じなければならぬ。

「敬老文庫」とは老を敬ふ精神を以つて設けられる文庫の名稱であつて、老人の好む所の書物を集め若い男女が交互に之を代讀して聽かせるものである。要はこれだけのものでは

るが」と囁んで含める様に説かれたのであります。茲におきまして、吾々は「老を敬ふ」文庫によつて、行詰つた圖書館經營の刷新を爲やうと決しまして、縣立圖書館より多大の御援助を戴き、従來の圖書館に敬老文庫を併設したのであります。その書籍は凡ゆる部面のものでありますが、最も多くは、歴史に有名な偉人傳記等であります。赤穂義士傳あり曾我兄弟あり、先代萩あり、荒木又右衛門あり、何れも古代より幾百年の間多數ある文學の中よりスグリ、スグラーれて今の世迄残つたもので、眞に日本文學の粹であると考へ、よき日本精神の繼承者であると信じます。

これ等偉人傳等を読み聴きまして歴史を尋ねることは即ち吾が尊嚴なる國體を識ることであり、吾が祖先の偉大さを教へられる要因でもあります。

敬老文庫の開設を村報に依つて發表するや、たちまちにして書棚が空になると云ふ様な状況でありました。爾來四ヶ年間、時局の進展するに従つて一般書籍の貸出率は低下し讀書の減退を來す傾向を示す中に、敬老文庫のみは依然として好成绩を持續し多大の効果を擧げて居るのであります。

現在敬老文庫の蔵書は約六〇〇冊であります。敬老文庫開設以來滿三ヶ年間の利用状況を申しますと、年齢別に見て、

二十歳以下 一八%
二十歳ヨリ三十歳 五二%

三十歳ヨリ四十歳 一〇%
五十歳以上 二〇%

でありまして十五歳以上が比較的多く、三十歳、四十歳間最も少く、勤勞の最もはげしい二十歳より三十歳の間が斷然多いことになつて居ります。

而も嬉しいことは「嫁」と云はれる年齢の人々の最も多く利用して居ることであり、燈火親しむ秋の夜永に、嫁が姑に「赤穂義士傳」を読んで聴かせてゐる光景を想ひ浮かべて見て下さい。これあればこそ嫁姑の不仲は自然解消です。争ひ事は根絶いたします。一人の若者の讀む事に一家が耳をそばだて、聴き「大石良雄」の誠忠は明晩の所はどんなであらうか？ と一同が同じ心持で明日を樂み自然、和がなるのであります。

これが吾々の「敬老文庫」に期待する一端であります。

圖書館と云ふ名前は何かしら農民には、ビツタリと來ない固苦しい感じがありますが「敬老文庫」と云ふと本當に柔らか味のある、親しみ易い家族的な感じが多分にあるのであります。これが又利用方面に多大な影響を與へるものであると信じます。

最後に申しあげたいことは、事務方面と金融方面であります。事務方面に關しては係員は讀書を透した豊富な經驗者が絶対必要であります。これは申上ぐる迄もない事であり、吾館には多年の經驗者清水毛佐美、友野善三郎君等によつて愈々成績を擧げて居ります。又金融に就いては圖書館後援會の組織があります。方法は五ヶ年計畫でありまし

て一口金五圓也であります。一ケ年金壹圓也の拂込みで五ケ年終了であり、既に第一次は終り、引續き第二次計畫を施行して居ります。

此の組織遂行の上にも、村の長老によりよき理解を得る爲にも敬老文庫は非常な役割をいたして居ります。

猶本年は圖書館の擴張を念願しまして、皇紀二千六百年の記念事業に記念館の建設を計畫し着々實行に移して居ります。

次の代を負ふて立つ者は吾々青年であります。

村塾運動によつて有用な青年を作り出すと共に、よりよき圖書館經營によつて道心を長養し、心田を開拓し、御奉公の誠を致しまして、必ず吾が村をして天下第一番の模範村に築きあげる努力を續ける覺悟であります。

(本稿ハ昭和十五年九月二十七日北信五縣圖書館事業研究協議會ニ於ケル口演ノ原稿ニヨル)

414
178

昭和十六年一月十五日印刷
昭和十六年一月二十日發行

發行所 縣立長野圖書館

印刷所 宮澤印刷所

終

